

ヘルマン・カーザック

『激動の13週間』

高坂純子 訳・解題

あれは4月14日の夜だった。空襲警報が鳴り響いたとき、今年に入ってから毎晩のように防空壕へ駆けこんでいた私たちは、それをただ念のために発令された警報だ思いこんだ。そのような飛来機はこれまですべてベルリンを目標としていたからである。ドイツ帝国首都南西部に大規模飛行編隊が集結しているとのアナウンスが流れてから、私たちはようやく重い腰を上げた。それは私たちの住む地域だった。すると一発目の爆弾が破裂する音が聞こえてきた。それでも私たちはたまたま一発投下されただけだと思った。すると、ヒューン、シューンと爆弾の落ちる音がどんどん大きくなってきた。そこではじめて自分たちの町が大規模空襲の対象になることに気づいた。頭の上の電灯がもう揺れている。地下室もかすかに揺らぎ始めた。あちこちでヒューッと唸るような轟音とともに爆弾が破裂している。爆風で耳が痛くなった。今にも爆弾が命中して、家が倒壊しそうな気がしてならなかった。

同じ建物に住む者は、二部屋続きの地下室でそれぞれいつもの場所に腰をおろした。誰も一言も喋らなかつた。仮住まいの難民家族も一緒である。みんな保護眼鏡をかけ、煙と粉塵対策にマスクを手にし、身構えて緊張した顔つきで座っていた。爆弾が落ちた振動、あちこちで悲鳴の音があがる。そしてとどろく轟音。それが間断なく続いた。ときどき妻が私の手を探る。私たちは互いに黙って見つめ合っていた。一瞬爆撃の音が止んだ

とき、「この様子では、まったく終わりそうにないですね」と言ったのは難民家族の一人だった。またすぐにヒューン、ドーンという爆弾の音が聞こえ始めた。私たちはその猛威のなすがままだった。

いくどとなく私は自分が嵐の海の上に浮かぶ一隻の船に揺られているように思った。そう空想することで、気を紛らせたのである。ゴーッという爆撃音は、船のマストや帆をゴーッと吹き抜ける暴風に似ているように思えた。爆弾が落下する音は船のエンジン音に似ていたし、地下室が揺れると、船室にあるベッドが揺さぶられているように思った。ドアも窓も吹き飛ばされた。天井灯が揺らめいて消えたが、またついた。すぐ近くの電線はやられていないということだ。ときどき私は「あと少しの辛抱だ」と自分に言い聞かせた。ひたすら空爆が止むことを願っていたのである。私たちは時計を見た。よくわからなかったが、爆撃の音が聞こえ始めてから半時間ほどが経過していた。それは分刻みの半時間、一瞬一瞬がすべての半時間である。その後、地獄のような爆撃の回数は減って、しだいに激しい空爆はおさまっていった。

私たちは悪夢にうなされたように身を起こし、13段ある地下室の階段を上って中庭に出た。建物は無事だった。窓ガラスが2、3枚割れていた。家の中では何枚か扉が枠からはずれていた。戸棚からはいくつかガラスが落下していた。被害なし、である。すぐ近くで火災も起きていない。家の北と北東の方角では、空が白く光っていた。連続して爆発が起きていた。もくもくと立ち上る煙の下には暗紅色の炎、火災がいくつも起きているのだ。後になってからわかったことだが、駅に停車していた弾薬輸送車が一両、また一両と吹き飛ばされていたのである。轟音は朝の3時頃までとどろいた。

私たちは茫然となり、外の通りを少しばかり歩いてみた。およそどれほどの被害があったのか知るよしはなかった。あちこちで多くの人々がさまよっていた。困惑した顔、物見高い顔、無感動な顔…。あまり遠くまでは

行かなかった。新たに爆撃機がやって来たと聞いたからだ。もう空襲警報の発令もできない状態になっていた。数日経つと、被害の実態が明らかになってきた。旧市街はすべて廃墟と化していた。ポツダム王宮やバルベリーニ宮殿、市庁舎をはじめ、多くの街並みがここかしこで破壊されていた。ガルニゾン教会の塔は、翌日崩壊した。ニコライ教会では緑の丸屋根が最初は反り上がっていたが、数日経つと内側にへこんだ。

空爆の狙いは明らかに駅周辺にあった。その辺りは何キロメートルにもわたって塹壕が掘られていたところである。私たちの家から旧市街に向かって二つ通りを越えた辺りから先の地域は壊滅状態だった。家族にゆかりのある三軒の家もなくなってしまっていた。ホーエンヴェーク通りのアハト・エッケン（訳注：今日のフリードリヒ・エーベルト通りの交差点に位置し、18世紀後半に後期バロック様式の住宅群が建設された地区のこと）にあった私の生家も、フンボルト通りにある1780年建築のフギーネル家（訳注：ヘルマン・カーザックの大伯父 Eugène Huguenele）の住宅も、そして運河沿いの中央郵便局脇にあった家も。この郵便局脇の家には私の両親が1900年から30年代初めまで暮らしていたが、フリードリヒ大王の時代にはフルート奏者のクヴァンツ（訳注：Johann Joachim Quanz 1697-1773 フリードリヒ大王にフルートを教授した人物）が住んでいた。あとで私たちは母親の両親が住んでいた家から燃料になる木材を拾い集めた。

広い通りも狭い道も、多くが何日もほとんど通行不能となった。ここかしこで火がくすぶり燃えていた。私たちが住んでいる通りで被害を受けたのは、一番端の家だけだったが、近所にはすり鉢状の砲弾孔がいくつもあった。

日が経ち、あの夜の出来事も記憶の中で粉塵に紛れたようにかすんで見える。時間は容赦なく流れていく。個々の運命は顧みられない。被害にあった人々の話を聞いても、同情の言葉も出てこない。あまりにもはかない命が多く、恐ろしい話ばかりを聞くので、個々の人間がどれほど被害を

受けたのかわからない。まともに人の話を聞いてはおられず、ただ頷くのみだった。

町の中を歩くと破壊された風景ばかりが目につく。破壊のすさまじさが伝わってくる。焼け落ち骨組みだけになって聳えている教会のドームや塔が見える。泊る場所はないか、寝る場所はないか、と尋ねられる。おおぜいの人たち、28000人も人間が家を失った。死者は7000人、彼らの口は閉ざされたままである。

あの夜以来この町に住みついているのは物の怪なのか、誰もが恐怖と不安という魔物に襲われるようになった。

*

*

*

14日の空襲後、発電所は送電の時間帯を定めた電力使用制限の続行を見合わせていた。いずれにせよ町の三分の一は廃墟となっていた。さらに送電線が切れてしまった地域もあった。だが、被害を免れた残りの地域にはこれまで通りきちんと電力供給があってしかるべきだという要望があったのかもしれない。ばかげたことに電力事務所の責任者は、4月25日から以前と同じパターンで電力使用制限を再開した。毎日地区ごとに送電時間が変わるものだが、すでにロシア軍がポツダムの町を取り囲んでいたときの話である。人々は昼間何度も防空壕に駆けこまねばならなくなっていた。その防弾扉がつけられ真っ暗な中にいると、分刻みで正確な電力使用時間帯になっても、まったく明かりのない状態なので、ラジオのニュースを聞くことすらできなかった。万事が万事お役所的で、爆弾や砲弾や戦車の音など物の数には入らないと見えた。

市街戦が起きて銃声が聞こえるたびに、すぐ近くで音がするような気がした。すでに大砲の音は止んでいた。私たちには聞こえてくる音の印象だけが頼りで、この間ロシア軍がどの地区に近づいているのか判断すること

はできなかった。ヴァンゼー（訳注：ベルリン南西部の地区）からベルリナー・フォアシュタット（訳注：ポツダム北部地区）の方へ来ようとしているのか。あるいはヴェルダー・ヴィルトパルク（訳注：ポツダムの南西部郊外に位置する地域）からブランデンブルガー・フォアシュタット（訳注：ポツダム西部地区）の方へ向かっているのか。ルイーネンベルクとボルンシュテッター・フェルト（訳注：ともにポツダム北部地区）の方角で戦闘状態になっていることは間違いなかった。夜になった。むなしく待つ中で時間が砕け散るように流れていく。運命が容赦なく迫っていることが分かった。しかしそれについて誰も何も言わなかった。話題は当面の実質的なことばかりだった。願いはただ一つ、今、我々が置かれている、この神経がすり減る緊迫した状況から解放されることだった。それは早ければ早いほどよい。またこういうとき、伝説的陸軍がこちらに向かっているというような風聞がドイツ側から繰り返し流されたが、それに惑わされることもなかった。とうに戦争は敗北だとわかっていたのだ。しかし民間人を戦争の最後の最後まで付き合わせるか否かは、どこでも党の傘下にある軍隊に委ねられていた。

4月初旬、私はこれから自分の身の上に何が起きるかわからず、親しくしていた女医に、万一のために毒薬を処方してくれるよう頼んでいた。しかし肝心の処方箋薬局の方が爆撃で破壊されてしまった。それでも、もし彼女がとつぜん土壇場でパニックになってポツダムを去ることがなければ、約束した毒薬は入手できていただろう。彼女は車でメクレンブルクの向こうまで逃げてしまった。もし効き目の早い毒薬が手元にあったならば、私も家の者もどれほど安心できたことだろう。またその毒薬を発作的にあおることはなかっただろうと確信している。しかし毒薬に手を出すべきときの最終判断となると、生易しいものではなかったであろうが。

4月27日の夜、私たちは防空壕で眠った。もちろん服は着たままである。実質的に眠ったのは数時間、朝早く、パバーン、パバーンという一斉

射撃の音で目が醒めた。すぐ近くで発砲されているようだった。

*

*

*

そういうわけで4月27日の朝8時過ぎ、3台のロシア軍戦車がカイザー・ヴィルヘルム通りのイエーガー門近くに横づけされると聞いたときも、私たちは何の驚きも感じなかった。それは予想されていたことだった。私たちと同じ建物に住むヘップナー氏とカウフフェルト婦人は、配給食料品を購入するために外出中だった。しばらくして戻って来た二人は、外の通りに戦車が3台停まっていたが道は通してもらえた、と話してくれた。最初は辺り一帯が静まり返っていた。ときおり砲弾の破裂する音がした。おそらく音の出どころは、対戦車榴弾砲をもって進軍するドイツ軍兵士たちであろう。幸いにも今までこの近辺で銃撃戦はなかった。これまでポツダムでは大規模な市街戦はなかった。赤軍は北の方から市街区に進軍してきた。ネートリッツ（訳注：ポツダムの北部郊外に位置する地域）からノイエンガルテン（訳注：ポツダム北部地区）を通して、アレー通りまで進軍してきた部隊もある。しかしそういう事情は、さしあたり私たちの知るところではなかった。また私たちは、ロシア軍から各戸に降伏の目印として白旗を掲げるようにという布告が出ていたことも知らなかった。アウグスタ通りは私たちの住む通りと平行に走っているのだが、そこの住民はこの要請に従った。ナチ党の役員が阻止しようとしたにもかかわらず、である。そこでアウグスタ通りは戦車砲の被害を免れた。これも後になってから判明したことだが、イエーガー通りの兵舎の前では局地戦が起きていた。カイザー・ヴィルヘルム通りまで続いている通りである。

家の地下室に閉じ込められた状態の私たちは、いったい外で何が起きているのか推測するしかなかった。私たちは防空壕とその真上にある母の住居の台所で、じっと時が過ぎるのを待った。表通りに面した部屋には留

まることはもちろん入ることもためらわれた。調理は母のコンロで行なった。朝早く起床していたので、もう午前中に昼食となった。何の変化も起こらず、時間が過ぎていった。たえず銃声と大きな爆発音がすぐ近くから聞こえる。私はこの2日間髭を剃っていなかったので、剃ろうと思った。いつも書類カバンに入れて持ち歩いている髭そりを、上の風呂場に持って上った。しかし、突然激しく撃ち合う音が近づいてきたので、また母の住居の台所に引き返した。お湯を少し用意して、顔に石鹸を塗り始めたちょうどそのとき、突然轟音のような砲撃音が聞こえた。何台もの戦車が砲門をすべて開け発射している。戦車はイエーガー通りからやって来て、カイザー・ヴィルヘルム通りを横並びになって進んでいるではないか。私たちはまた急いで地下室にもぐり込んだ。緊張して耳をそばだてて、音の意味を考えようとした。砲撃の音は絶え間なく続いている。正午に電力供給制限時間が過ぎ、1時半になって何とかラジオニュースを聞いたが、正確なことは何も伝えられなかった。そしてまた電力供給が止まった。荒れ狂ったような砲弾攻撃はしだいに収まっていった。砲弾の音は町の中心部の方角へ移っていったようだった。ガラガラと通り過ぎる戦車の音も遠ざかっていった。

数人の者が上の台所にいる母のところへ行った。そのときだった。上から「ロシア兵が中庭にいる」という声をした。戦車部隊のすぐ後についてきた歩兵部隊一団が、建物や中庭に侵入していたのである。正確に言えば彼らは侵入したのではなく、ただそこにいただけだった。彼らはここはどこだと言わんばかりに、物見高くその辺りをウロウロしていた。ひとりひとりの兵士はさほど好戦的には思えなかった。ヘップナー氏が中庭に通じる戸口のところ立っていると、前にいた若い兵士がシュナップスを1本投げてよこした。近くにある店で調達したものである。タバコを欲しがる兵士もいたが、タバコを差し出すと断った。彼らは辺りを嗅ぎ回るようにして立っていた。私たちと言葉が通じないので、困惑気味の様子だった。多

くの兵士が水を要求した。私たちは水をタンクからカップに入れて持っていったが、たいていの場合、兵士たちが口をつける前にまずこちらで飲んで見せなければならなかった。その不信感が何ともほほえましく、私は彼らの目をじっと見つめた。しばらくすると、毒が入っていないことを証明するために私が一口飲まなくても、手を出す者が出てきた。私たちの緊張は頂点に達した。「ロシア、ヘイタイ、イイヒト」と片言で話す者もいる。彼らは私たちの肩をたたき「戦友よ」と言った。ある者が「ココ、ドコノマチ？」と私に聞いた。私が町の名前を教えると、彼は笑いながら下手な発音で「ベエルリン近くのポオツダム」と繰り返した。どうやら事の実態は、ナチのプロパガンダが国民に教えこんでいたこととはまったく異なるようだった。

最初に姿を現した数人はまだ中庭にいた。他の者たちは大勢で玄関ホールを出入りしている。今のところ住居の中に押し入る者はいなかった。また私たちの誰がしかを捕えて、銃やピストルで脅す者もいなかった。大多数が若者だった。たくましく健康的で、友好的に見えた。もっともその顔には明らかに疲弊した様子が見てとれた。その兵士たちの中で、一人の年配の男が目にとまった。格好をつけず、気品あふれる物腰の男だった。背が高くすらりとしていて髪は黒く、鬢のところだけ白くなっていた。顔は日に焼けていた。天性のものだったのか、彼の動きには強さと落ち着きとがあった。私はすぐ彼に対して親近感を覚えた。彼と意思疎通できないのが残念だった。彼が上官なのか、一介の兵卒なのかもわからなかった。階級章のことはよく知らなかったからである。いずれにせよこの男は、レフ・トルストイの小説、たとえば『ハジ・ムラート』などの中に出てくるロシア人兵士によく似ていた。

私たちはどうしたらよいかわからず困惑していたが、その気持ちも初めてロシア兵と接触して収まってきた。身の安全を感じたわけではない。しかし来たるべき事態に対処できるだろうという気持ちになった。その間兵

士の一団は、私たちが立っていた裏玄関の階段のところへ何をしてもなく、押し合いへしあいしながら集まって来た。

そのときアンネが「下の地下室で何かを叩くような鈍い音が聞こえる」と知らせてくれた。その音は隣の建物から壁越しに伝わってきているもようだった。誰もが知っていたことだが、隣の建物にはナチ親衛隊の事務所が置かれていた。ひょっとしてこの期に及んで建物を爆破させるつもりなのか。私は身振り手振りで、その危険性とナチスが潜んでいる可能性を年配の兵士に伝えた。彼は意味を理解したようで、2人の部下に表通りの方から様子を見に行かせた。彼自身は気乗りしない様子で私たちの庭を通して、塀越しに隣の中庭めがけて手榴弾を投げ込み、とりあえず満足したようだった。その間、地下室からは石が崩れ落ちる音と女性の声が聞こえてきた。もともと地下室には建物が破壊されたとき通り抜けられるようにつくられたトンネルがあって、反対側から仮の遮断壁が取り付けられていたのだが、そこから3人の女が子供を2人連れて私たちの地下室に這いりこんできたことがわかった。ロウソクの灯りで見ると、その一人はすでに逃亡したナチ親衛隊の運転手の妻だった。もう1人の女性は「向こうの地下室は非常にほこりっぽくて、長時間子供を置いておけない」と興奮した顔つきですぐウソだとわかる説明をした。彼女たちの軽率で不当な行為がどんな危険を我々にもたらすか、すぐにわかった。もちろん彼女たちはただ不安に駆られて家を離れ、こちらへやって来ただけのことである。かつてナチ親衛隊のオフィスだったその建物は、今や彼女たちにとってあまりにも危険な場所となっていたからだ。地下室に開口部ができて冷たい風が吹き込んでくるため、手前にあるその部屋に居ることが難しくなった。しかしそれはさほど憂慮するべきことではなかった。隣の建物との間に二度とふさがれることのない通路ができて、誰でも妨げられず中に忍び込めるようになったことが腹立たしかった。後に家宅捜査が行われたとき、この心配は的中した。しかし一番困った問題は、私たちがナチ親衛隊の関係者で

あるという疑いをかけられる可能性が出てきたことだった。ここを即立ち去るようにと私が叱り飛ばしたにもかかわらず、女たちは拒絶し、厚かましく地下室の奥に居座り続けた。

もう一度上に行くと、まだみんなは裏階段の小ホールや、私の母の台所や、中庭に通じる階段のところに立っていた。ロシア軍がやって来てから、ゆうに1時間は経ったであろう。誰にも表通りの様子はわからない。ときおり銃声が聞こえたが、ほとんど気にならなかった。かなり冷え込んでいる。冬のコートを着ていたが、寒さで震え上がった。

私の頭の中には、開いたトンネルによってどういう事態が起こりうるのか、それがずっとひっかかっていた。これからは家族の誰かが地下室にいないなければならない。私たちは貴重品をそこに置いていたからである。そういうわけで二人の兵士が中庭にやって来て、家の主人夫婦を尋ね回っていることに気づかなかった。私たちが名乗りをあげると、他の数人ともども表通りに入るよう命令された。「ついて来い！ついて来い！」と言われた。私は驚き少し動揺して「どういうことなのか」と尋ねたが、返事はなかった。「いったい誰に家を出ろと言うのか」「私と妻だけなのか、全員なのか」と聞いてみた。「全員だ。ついて来い！」と返答があった。マリアとその姉が数歩前を歩いた。ヘップナー夫婦がおぼつかない足取りでついて来る。急き立てられはしなかった。私は庭の屋外階段のところで立ち止まって、書類カバンを台所に置いてきてよいか、と尋ねた。それは難なく許可された。それから私は他の者の後を追った。アンネがそこに加わった。エルゼは母の住居のドア陰に隠れていた。カウフフェルト嬢が残された者とともに列に加わろうとすると、一人の兵士が手で合図をして押しとどめ、家の中に居るように言った。アンネがその男に「一体全体何事なの、私たちをどうするつもり」と聞いた。男は横を向き、困ったように目を伏せた。彼には質問の意味がまったくわかっていなかったのであろう。

家の玄関フロア付近は兵士であふれかえていた。玄関から外へ出る

と、前庭にある細いアプローチのところには機関銃が据えつけられていた。銃口は誰もいない表通りの方に向けられている。階段では射撃班が腰をおろしている。「どこへ行けばいいのか」と聞くと、「草地の上だ」と言われた。

どうやら私たちは銃殺されることになったらしい。わけがわからなかった。驚くべき誤解だった。よりもよってナチスと何の関係もない私たちが、偶然取り違えられて犠牲になるとは。しかし私はけって腹も立たず、絶望もしなかった。機関銃に背を向けてゆっくりと車道を横切りながら、「いよいよ最期だ」と自分に言い聞かせた。草地の手前にある砂利道で、私はもう一度マリアを抱きしめた。そしてマリアにキスをして「最期だな」と言った。「ええ」とマリアは答えた。ヘップナー氏の顔からは血の気が失せていた。ヘップナー婦人は震えていた。二人は熱心なナチ党员だった。私たち他の者はそのことを黙っていた。純粋な良心からである。アンネが「これから射殺されるの」と大きな目で尋ねた。「そうらしい」と私は答えた。草地には縦横に6個ほど墓穴が掘られていた。手早いことである。まあ、そういうことなのだろう。私たちは、草地の中央で顔を我が家に向けて一列に並ばされた。一巻の終わり、である。

「道路の反対側まで進め！」「将校のところへ」とついに指示が出された。私たちがそこまで行くと、将校らしき男が意味ありげに立ち去った。するとまた「そこにある建物の地下室へ行け」と指示された。私たちの家の向かい側にある建物である。私が一番うしろから階段を下りた。一瞬、首筋を撃たれるかと思ったが、下まで辿り着いた。地下室の入り口のところにはドイツ人が二人立たされていた。待たされた。私たちは事の成り行きをあれこれと勘ぐった。誰も口には出さなかったが、自分たちの身の上がどうなるのか考えていた。

時間は長く感じられたが、あまり経っていなかったと思う。一人の兵士が下りてきて、私に上まで来るように合図をした。彼は「一人で」と言っ

て、さらに「ちょっと話が聞きたいだけだ」と付け加えた。私は落ち着いていた。実際、すでにみんな死の覚悟ができていたからである。建物前の通りに一人の若いコミッサール（ソ連人民委員）が立っていた。彼は涙目を向けて苛立ちを押さえながら、通訳を介して私にいくつか質問をした。鉄橋はいくつあるのか。どこにあるのか。破壊されているのかどうか、と。私は彼に自分の知っているかぎりの情報を与えた。最後に、ポツダムの地図を持っているかどうか尋ねられた。私が「はい、家にあります」と答えると、すぐさまそれを取って来るように言われた。通訳の男が同行した。そこでまた通りを渡り、さっき私たちが立たされていた草地を越え、置かれたままの機関銃の脇を通って家の中に入った。家の階段部には兵士たちが座って、缶詰の肉を平らげていた。玄関フロアのあちこちに他の兵士たちが寝そべっている。私は寝ている者をまたがねばならなかった。

私たちの住居のドアはこじ開けられていた。私は自分の部屋からポツダムとその周辺部の地図をいくつか取ってきて、通訳と一緒にまた階下へ下りた。すでに下の玄関フロアではコミッサールが待ち構えていた。私は彼に近くにあるイエーガー門の位置を説明した。彼はすぐ方角を確かめた。さらにたくさん質問を受けた。私を試そうとしているような感もあった。そうしてしばらくの時間が流れた。すると彼は私から一枚の地図をひったくった。「どうぞ」と私は言った。彼は他の地図には見向きもせず、足早に立ち去っていった。

通訳の男は、玄関脇にある母の住居に入っていった。自由になった私は、彼の後を追いかけた。部屋は兵士であふれかえていた。兵士たちは椅子やベッドの上に腰かけ、床にうずくまっていた。年老いた私の母はソファに腰をおろしていた。その他の居住者たちは、台所に通じる廊下のところにいた。ピアノの蓋が開いていた。通訳の男が指一本で何かメロディーを弾こうとしたが、うまくいかなかった。私にピアノで何か弾くようにと声がかかった。勝手にピアノが弾けるものだと思われたらしい。頭

がクラクラ、両手はガチガチである。どだい死を背負っている体だ。私は何年もピアノの鍵盤に触っていなかったの、あまりうまく弾けなかった。でも兵士たちはヴォルガの歌を所望した。何人かが一緒に口ずさんでくれた。それから彼らは何かドイツ民謡を聞かせてほしいと言った。さしあたり頭に浮かんだのが「野バラ」である。兵士たちの顔が、音楽を聞いていると明るくなってきた。ときどき水を飲み、他の者まで部屋へやって来た。通訳の男が「ポルカを弾いてくれ」と言った。私が楽譜通りというわけにはいかないが、聞き覚えでよければと言うと、彼はそれを通訳して仲間に伝えた。「弾いてくれ、何でもいいから好きな曲を」と彼は言った。私はシュトラウスのワルツからはじめて即興メドレーをつくった。私が弾く手を休めようとする、「続けて、もっと弾いてくれ」と何度も声がかかった。私は何度も通訳の男に、さっき一緒に連行された家の者を帰らせてもよいかと尋ねた。私が長時間戻らないので、きっとみんな動揺しているはずである。通訳の男は肩をすくめて「待つように」と言った。どうやら彼には権限がないらしく、コミッサールか将校のどちらかが戻るまで待つつもり様子だった。職業を聞かれて私は「作家」だと答え、「詩人」だと付け加えた。兵士たちが一瞬顔を上げて、私の顔をじっと見つめた。私が通訳の男と話をしていると、二人の兵士が庭にあったマリアと私の自転車を失敬するのが窓越しに見えた。せめて仕事に必要なマリアの自転車だけでも手をつけなくてほしい、としかたなく私は言ってみたが、通訳の男は「これくらいの被害ですむのなら…」と言いたげに、軽く手を振っただけだった。

一時間が経過したのだろうか、先程連行された他の者も家に戻ってよいとの許可が下りた。しかし通訳の男はついて来ようとはせず、「通りで銃声が聞こえたら、注意するように」とだけ言った。玄関を出ると、いつの間にか例の機関銃がどこかへ移動されていた。表通りでは、兵士たちが忙しそうにケーブルを敷設している。四方八方行き交う自動車、自転車、馬

車、牛車。誰も民間人のことを気にかけていないようだった。街灯や樹木が折れている。どこの家の垣根も戦車で破壊されていた。このときは周辺を見回す余裕がなかったが、ほとんどの建物に戦車による砲撃の痕が見られた。通りの反対側の建物の前で、妻が他の人たちと一緒に立っているのが見えた。私は早くこちらへ渡ってくるように合図した。言葉をかけ合っている場合ではなかった。ただアンネだけが「マリアったら、何度も何度も『あの人、戻って来ると思う？』って私に聞くのよ」と言った。私たちはともに死を目の前にしたときから、お互い姓で呼び合っていた者も名前でも呼び合うようになっていた。当然のことだろう。

こうして再び私たちは家の敷居をまたいだ。まだ黄泉の客とならずにすんだわけだが、理由はわからない。その後の24時間、いろいろなことがあった。あのとき手っ取り早く即座に命を絶たれ方がましだった、と本気で思うことさえ多くあった。

戒厳令のいかんではもっと酷い目に遭った人もいれば、戯事ですんだ人もいたであろうが、多くの人が同じような瞬間をくぐり抜けてきたことを私は知っている。それは私たちにとって、恐怖体験をくぐり抜けたあとずっと止まったままの時間であると言えるだろう。それは厳然たる事実として、心と体に刻み込まれている。だがそれによって個々の人間に何か変化があったのだろうか。誰もがあたかも何事もなかったかのように生活してきたのではないか。それともあの後起きたことも、今起こっていることも、付録で借り物の人生にすぎないのだろうか。

あれから三週間が経過した。私は机に向かっている。時計の針は機械的に進んでいく。しかし私の心の中にある時計は止まったままのようである。そして今でも体の震えがおさまらない。

《 解題 》

ヘルマン・カーザック（Hermann Kasack）の『激動の13週間』（原題：*Dreizehn Wochen –Tage- und Nachtblätter–* Berlin, 1996）は、第二次世界大戦終結前後13週間の日々を綴ったもので、「ポツダムにおける戦争終結に関する1945年の記録」*Aufzeichnungen aus dem Jahre 1945 über das Kriegsende in Potsdam* という副題が添えられている。作家であり詩人であり、また出版者でもあったカーザックは、この激動の日々をポツダムのカイザー・ヴィルヘルム通り13番地（現在のヘーゲル通り13番地）にある自宅で体験した。48歳のときのことである。第二次世界大戦末期のポツダム空襲をはじめとして、ソビエト軍の侵攻、駐留によって混乱するポツダムの町を描いた『激動の13週間』は、戦争終結前後の市民生活を作家の眼でほぼリアルタイムに書きとめたものとして、きわめて貴重な記録の一つだと言えるであろう。とくにソビエト軍がポツダムの町に侵攻してきた「最初の30時間」¹を記録した部分からは、戦争末期において置き去りにされたドイツ一般市民の生々しい体験を読み取ることができる。ここに掲載した翻訳はその一部で、1945年4月14日のポツダム空襲と、同年4月27日のソビエト軍侵攻の様子を伝えた箇所である。

この『激動の13週間』は、1963年にラジオ放送向けにカーザック自身による部分編集が行われたことを除き、作家の存命中には出版されず、また1966年にカーザックが亡くなったあとも長い間活字にはならなかった。それはなぜだったのか。ドイツが東西に分断された1949年、カーザックは西ドイツのシュトゥットガルトに転居する。カーザックは1948年にゲッティンゲンで再結成されたドイツペンクラブの設立メンバーであり、また1953年から1963年まではダルムシュタットを本拠地とするドイツ言語文学アカデミーの会長を務めた。これは1949年8月28日、ゲーテ生誕200年の折りフランクフルト・アム・マインのパウル教会で設立されたアカデミーである。『激動の13週間』の出版が見送られた背景には、この

ようにカーザックが西ドイツに移住をしてその文壇の中心となって活動を続けていたことと、一方でポツダムの町が戦後東ドイツに位置していたことがあったと考えられる。1990年の東西ドイツ統一後、ようやくソビエト進駐軍支配下にあったポツダムの歴史に光が当てられるようになり、関連書籍が出版されるようになった²。その新しい潮流の中で、1996年、カーザックの生誕100年を契機として『激動の13週間』もまた世に送り出されたのである。カーザックの息子であるヴォルフガング・カーザック (Wolfgang Kasack) が編集にあたり、作家のヴァルター・ケンポフスキー (Walter Kempowski) が序文を、また神学者のギュンター・ヴィルト (Günter Wirth) が注釈と後書きを書いている。ヴィルトは旧東ドイツにおけるゲルマニストとしてハインリヒ・ベル (Heinrich Böll) に関する著作を持つ人物でもある。

『激動の13週間』は次のような言葉で書き起こされている。

「ここ数日間何が起こるかわからず、私は自宅の守衛役を引き受けている。5年と9ヶ月の間続いた戦争が終わろうとし、ポツダムの町も私たちの住む地区も人であふれかえっている。私たちの家はこれまで激しい空襲に遭ったが被害をまぬがれ、この数日間は町を制圧するためにソビエト軍がしかけた軍事攻撃にも持ちこたえた。そこで建物を不法侵入から守る必要が出てきたのだ。あちこちで不安がつゆ、町が混乱の様相を呈し始めていたからである。いつ普通の生活が脅かされるかわかったものでない。しかし時間の経過とともに、これまで緊張し通しだった身も心もほぐれつつある。」³

この文章が書かれたのは1945年5月9日、ドイツ国防軍が無条件降伏を決定し、連合国軍事司令部がドイツの全権を掌握したときである。空襲の被害をかるうじてまぬがれ、また町の制圧時における軍事攻撃にも何とか持

ちこたえたカーザックの家は、ヴィラ (Stadtvilla) と呼ばれる3階建ての瀟洒な建物だった。それはカイザー・ヴィルヘルム通りに面して短いアプローチを持ち、建物裏手には広い中庭があった。カイザー・ヴィルヘルム通りはその昔町の外壁が巡らされていた大きな通りで、道の中央部には幅広い緑地帯があった。翻訳文中でカーザックがロシア軍にナチ党員と間違われて立たされた場所は、この緑地帯である。カーザックがこの家に移ってきたのは1927年末のこと、勤務していたベルリンの出版社 S. フィッシャー社⁴をやめフリーの物書きとなっていたカーザックが、放送作家として安定した収入を得られるようになった頃の話である。6部屋あった2階の住居を間借りして、妻のマリア (Maria Kasack)、息子のヴォルフガング (Wolfgang Kasack)、娘のレナーテ (Renate Kasack) とともに家族4人で暮らしていた。この建物は1930年に医者だったカーザックの父リヒャルト・カーザック (Richard Kasack) によって購入され、父親名義ではあったがカーザック家の所有となった。ヒトラーが政権の座についた1933年、カーザックは放送禁止処分を受けて仕事のない状態に追い込まれ、その後長い間カイザー・ヴィルヘルム通り13番地で「カタコンベのような存在」⁵の日々を送ることになる。ちなみにその間の生活は整体師の資格を持つ妻マリアによって支えられたという。1941年、カーザックはもう一度 S. フィッシャー社 (1942年に「ズーアカンブ社・前 S.フィッシャー社」と社名変更)⁶に原稿審査係として入社し、ポツダムからベルリンまで通勤するようになった。すでにペーター・ズーアカンブ (Peter Suhrkamp) が社主となっていた時のことである。そして出版人として働くかわら、1942年、カーザックはこのカイザー・ヴィルヘルム通り13番地の家で代表作のロマン『流れの背後の町』*Die Stadt hinter dem Strom* を書き始めた。

戦争の末期、カーザックの息子ヴォルフガングは衛生兵として戦地へ赴き、娘レナーテはボーデン湖畔の知人宅で暮らしていた。このように二人

の子供は家を離れていたが、カイザー・ヴィルヘルム通りにあったカーザック家の建物には、戦時下ゆえのことも、いろいろな人々が入り出し、同じ屋根の下で暮らしていたようである。翻訳箇所にもたびたび彼らの名前が実名で出てくる。まず建物の3階に住んでいたヘップナー（Höpfner）夫婦、ヘップナー氏の方は警察官で、この二人はナチ党员でもあった。それからカウフフェルト（Kauffeldt）親子、この母と娘の二人はリーガ出身で、ポーゼン（ポーランド中西部の商工業都市で、1945年までドイツ領）から難民としてポツダムまでやって来て、カーザックの長男ヴォルフガングの部屋で仮住まいをさせてもらっていた。二人はロシア語が話せたので、建物がソビエト軍に占拠されたとき、通訳の役割を果たす。またカーザックの義姉ヨハンナ（Johanna Fellenberg）も一緒に住んでいた。妻マリアの一番上の姉で、郵便局で働き1階を住居としていた。彼女はカーザックの『流れの背後の町』のタイプ原稿を作成した人物でもある。もう一人名前が出てくるのがアンネ（Anne Mörike）だが、彼女は出版社におけるカーザックの同僚で、P. ズーアキャンプの秘書をしていた女性である。戦争の最終局面で予想される市街戦を避けて、ベルリンのツェーレンドルフからカーザックのところに一時避難をしていた。その他、1階に住んでいたカーザックの母親エルスベス（Elsbeth Kasack）やお手伝いの女性エルゼ（Else）についても言及されている。このときカーザックの母親はすでに未亡人となっていた。

当時、このように非常に詳細な日常生活を記録として残すことがきわめて困難な状況であったことは、あらためて言うまでもあるまい。生活環境は、食料事情ひとつとっても大変厳しいものだった。ガスはない、電気もない、水は何とか確保できるものの、飲料水として用いるには煮沸が欠かせない。戒厳令下で外出時間は制限されている。疫病の心配もある。預貯金は凍結されている。家の建物は占拠されて自由に使えない、等々。そしておそらくカーザックにとって何よりも心配だったのは、二人の子供たち

からまったく音信がなかったことではないか。とりわけ戦後息子のヴォルフガングは捕虜となって帰還が1947年まで遅れるので、1945年当時、父親であるカーザックの心配は想像に余りある。またロシア兵に占拠されて混乱する暮らしの中で、1階に住んでいた高齢の母親のことも気がかりであったに違いない。その悪条件の中でカーザックは机に向かい、黙々と手記を書き続けた。それは聖霊降臨祭（Pfingsten）が過ぎ6月が終わろうとする頃、ピリオドが打たれる。手記は整理されて最終的に200枚ほどのタイプ原稿が出来上がった。カーザックは1942年からロマーン『流れの背後の町』を書き始めていたが、1945年、その心血を注いでいた小説の執筆さえままならず、筆を投げざるをえない状況の中で、日々綴られた手記が『激動の13週間』だった。それはカーザック自身の言葉を借りると「自分と自分の身の回りで起こったことを自分なりに整理をして考え直す」ために、また「自分たちがある一定の期間、外面的な意味でも内面的な意味でも何とか乗り越えてきた状況を、そこに居なかった子供や親しい友人に知ってもらう」⁷のために残された記録である。1945年7月30日、カーザックはH.E.ノサック（Hans Erich Nossack）に宛てた手紙の中でこの手記について触れ、「睡眠不足で疲れ切った体に鞭打って、毎日私は自分の日常を手記にまとめています。タイプ原稿で200枚、四分の三以上が完成しました」⁸と書いている。そしてそれに続いて、自分の手記をゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe）に倣って「人生の主たる仕事（Hauptgeschäft meines Lebens）」であるとも表現している。『激動の13週間』は創作活動の空白期を埋めるようにして書かれたもので、日付こそふられていないが、内容的には日記にきわめて近い手記である。そのような手記にあえて当てはめられた「主たる仕事」という言葉には、激動の日々におけるカーザックの断固たる決意と覚悟を窺うことができるだろう。

『激動の13週間』の後日談となるが、1945年8月12日、突然カーザック

は自宅の建物を明け渡すようにとの通達を受け取る。カイザー・ヴィルヘルム通りの1番地から14番地までと、アレキサンドリネン通り、イェーガー通りの全戸がソビエト軍による接収の対象となったのである。こうしてカーザックは、ポツダム空襲でもソビエト軍の軍事攻撃でも被害を受けなかったカイザー・ヴィルヘルム通り13番地の家を、やりきれない思いで後にした。彼もまた戦争で住居を失った一人となったのである。

カーザックは出来上がった『激動の13週間』のタイプ原稿を、折りあるごとに友人や知人に見せていた。先に名前を挙げたノサックもまたその一人で、彼は1945年11月の末、書留郵便で2回に分けて送られてきたそのタイプ原稿を受け取っている。1966年1月10日、カーザックが亡くなったときノサックは追悼文を寄せて、その中で『激動の13週間』について次のように述べている。

「…彼が書いたものの中に、ポツダム占領後の13週間を描いた感動的な手記がある。その原稿は慎重さゆえにこれまで公刊されてこなかったが、いつか活字となる日が来ることだろう。そして後世の人たちはこの報告を、生と死の間、もっと正確に言えば、死と新しい生の間にあった瞬間の歴史的ドキュメントとしてとらえるであろう。ドキュメントとしてなのか？祖父たちが体験しなければならなかったことを、孫の世代が物を書く素材にするのは当然の権利である。しかし、次のことを忘れないでおきたい。一人の男が自分の生まれた家の向かい側にある緑地帯で、自分のために掘られた墓穴のふちで、機関銃の銃口を見つめていた。その男にとってドキュメントも文学も問題ではない、ということ。それは今世紀前半の知識人がつねに覚悟していなければならなかった状況であった。カーザックは我々に代わってそれを最後の最後まで体験しつくしたのだ。」⁹

カーザックの『激動の13週間』は「ポツダムにおける戦争終結に関する1945年の記録」という副題に集約されているように、基本的に1945年のポツダムにおける戦争終結前後の出来事を克明に記録した手記である。それはポツダムというローカルな町の一角から見た、一個人の証言記録でもある。このような証言記録がしばしば普遍性を持ち、歴史年表を補填する貴重な「歴史的ドキュメント」となることは、ノサックの言葉を待つまでもなく確かであろう。しかしまた『激動の13週間』が作家カーザック自身の日々を綴った記録であることも事実である。すなわちそこにはカーザックが激動の日々を一人の作家としてどのように過ごしたのか、何を考えながら過ごしたのか、という「文学的心誌」とでも言うべきものが織り込まれている。カーザックが1942年から書き始めたロマン『流れの背後の町』は、東洋学者であるローベルト・リントホフ博士が謎の依頼を受けて汽車に乗り、廃墟となった町に到着するところから物語が始まる。カーザックは第12章で一時中断していたその小説の執筆を、1945年9月、引っ越し先のズィギスメント通り（現在のハンス・ザックス通り）にあった借家で再開する。小説の書き割りとなっている死者の住む「廃墟」の町は、1942年、まだドイツが大都市空襲を体験しない頃に設定されたものだったが、周知のようにそれは戦後発表されたときドイツの「ゼロ時」（die Stunde Null）を象徴する光景となっていく。このような小説の成立事情から考えると、おそらく執筆再開後の「廃墟」の上にはカーザック自身の空襲体験をはじめとして、「激動の13週間」とその後起きた数多くのさまざまな出来事が塗り重ねられていたのではないかと考えられる。そこにはまたノサックの表現を借りるならば、「今世紀前半の知識人がつねに覚悟していなければならなかった状況」も含まれていたに違いない。その意味でカーザックの『激動の13週間』は貴重な「歴史的ドキュメント」の一つであると同時に、『流れの背後の町』の作品解釈において鍵と

なりうる、重要な手記であると言うことができるだろう。なお具体的な作品検証については稿を改めて述べたい。

注

1. Hermann Kasack: *Dreizehn Wochen –Tage- und Nachtblätter–*. Berlin, 1996.S.97.
2. 一例として Franz Fabian(Hrsg.): *Aber der Wagen, der rollt...Potsdamer erinnern sich*. Berlin, 1995 が挙げられる。
3. Kasack: a.a.O., S.10.
4. カーザックは1920年からポツダムにあった出版社キーペンホイアー社で働いていたが、1926年にベルリンのS. フィッシャー社に移った。
5. Hermann Kasack : a.a.O., S.176.
6. 拙論『検閲の時代を生きる－H.E.ノサックとH.カーザックの「秘密言語」－』（「KGゲルマニスティク」第14号、関西学院大学、2009年）参照
7. Kasack: a.a.O., S.146.
8. Hans Erich Nossack:*Geben Sie bald wieder ein Lebenszeichen—Briefwechsel 1943-1956*. Frankfurt am Main, 2001. S.118.
9. Hans Erich Nossack: *Er wurde zuletzt ganz durchsichtig – Erinnerungen an Hermann Kasack–*. In: *Pseudoautobiographische Glossen*. Frankfurt am Main, 1971. S.51. なお引用文中でノサックは「一人の男が自分の生まれた家の向かい側にある緑地帯で…」と書いているが、カーザックが生まれた家はカイザー・ヴィルヘルム通りではなくホーエンヴェーク通りにあったので、この箇所はノサックの誤解であったと考えられる。

その他の参考文献：

Chronik des 20. Jahrhunderts. Braunschweig, 1982

Christiane Kruse: *Wer lebte wo in Potsdam*. Würzburg, 2012

Hermann Kasack: *Die Stadt hinter dem Strom*. Frankfurt a.M. , 1949